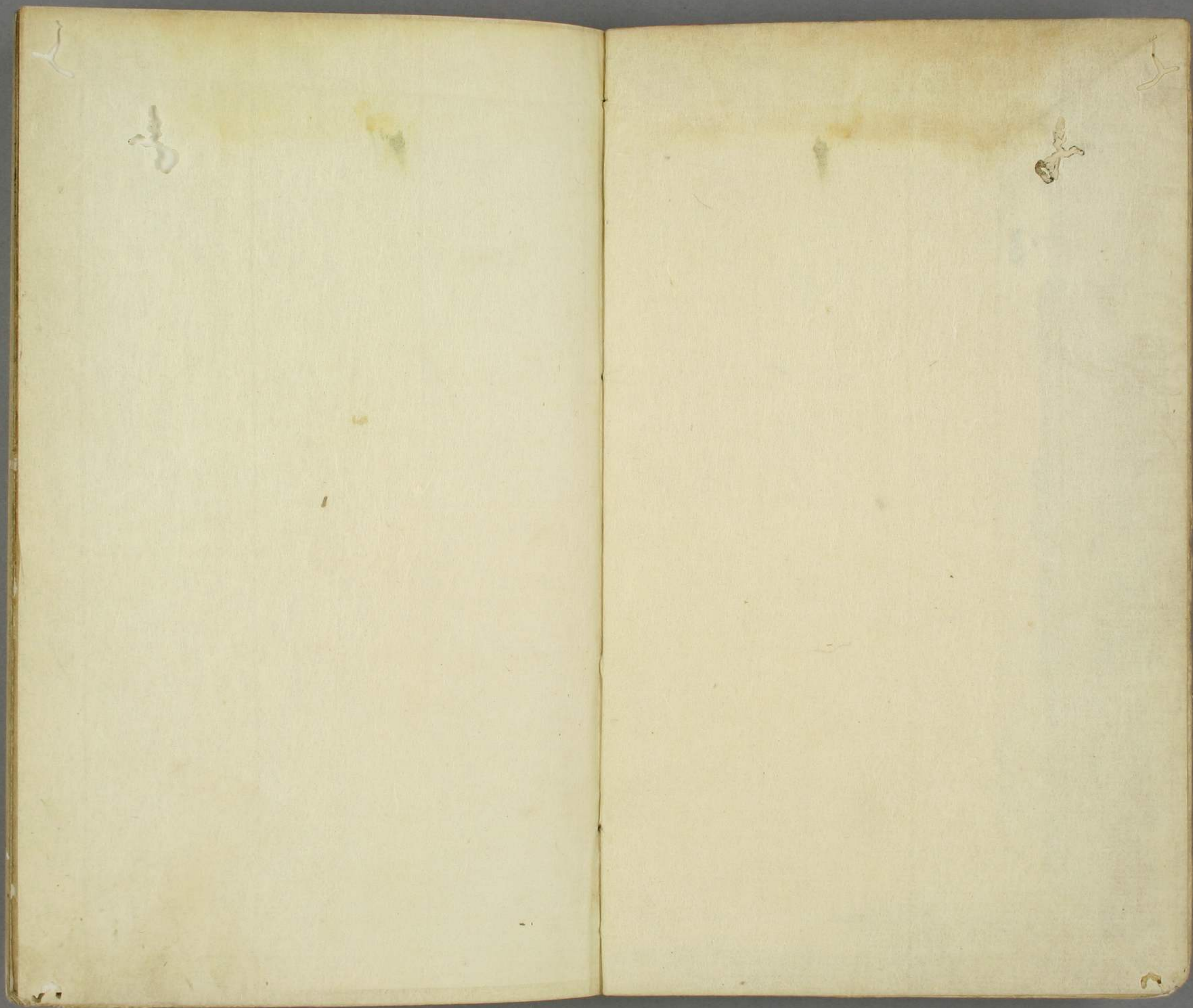


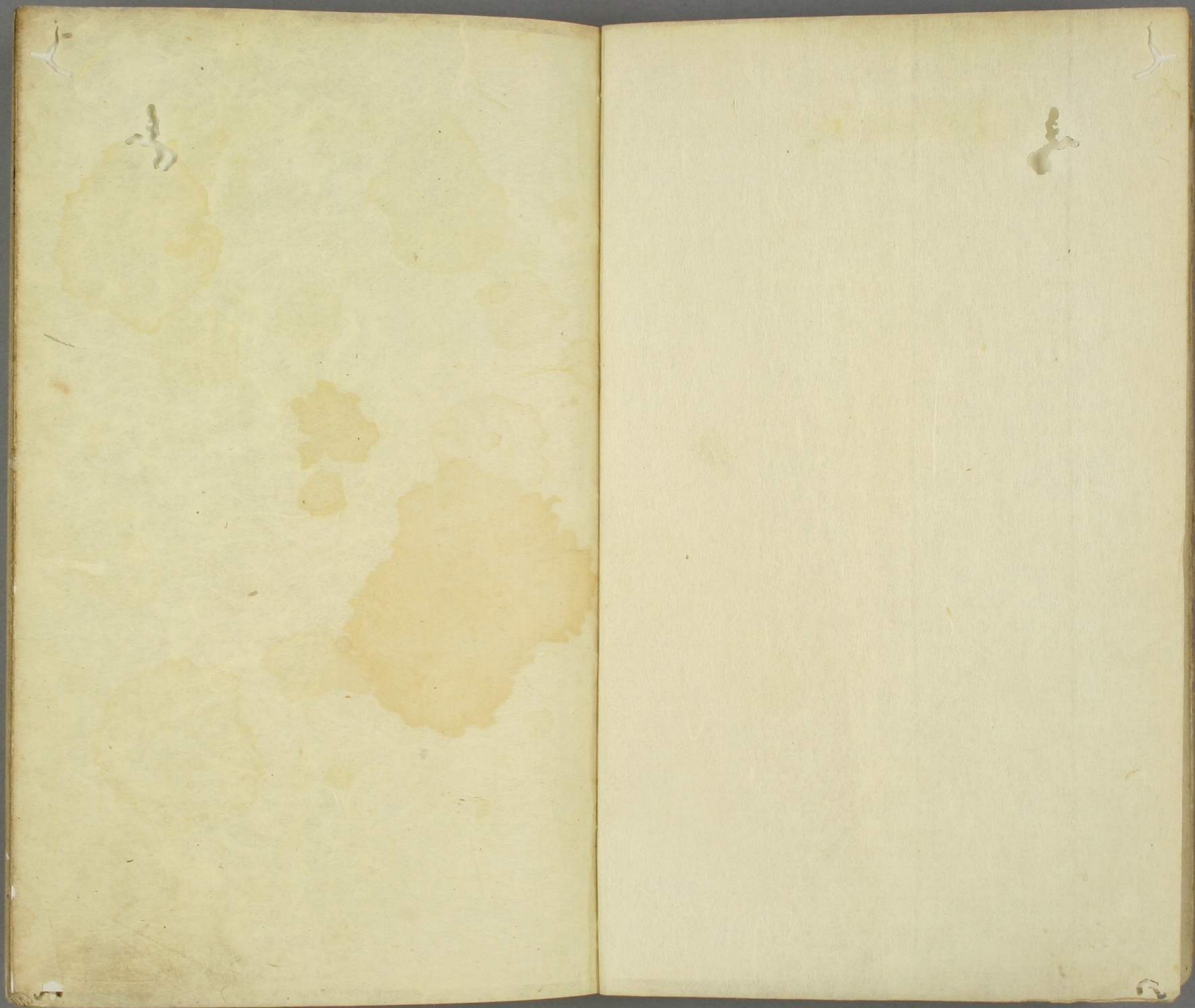
拾遺集

七

特別
6088
1







拾遺愚草上

百首哥

特

門 8
號 6088
卷 1

初學

二頁

大輔

閑居

早率 二序

歌月

十題

哥合 六百番

院初序

子五百番

内卷五

内裏在可

院

閑白危在可家

藤河

已上千五百首

初學子百首

歌百首和詞

養和元年四月

春女首

侍從

一、所、見、此、等、言、は、可、方、此、汝、の、竹、也、多、く、く、ま、い、ま、り、ん
竹、産、福、の、く、ま、ま、う、く、い、か、こ、く、冬、此、も、り、り、り、ん
言、は、ら、る、孫、と、わ、か、ま、ま、い、く、ら、多、く、此、解、は、ま、せ、し、お、わ、し
雲、は、ら、ら、く、つ、そ、か、り、く、雲、此、歌、は、梅、の、ま、ろ、く、歌、は
梅、の、乳、精、を、と、て、以、風、を、そ、く、り、以、風、を、そ、く、り、の、か、け、り、り
多、く、よ、り、く、ま、い、ま、り、梅、歌、を、見、る、か、ら、う、ら、の、お、り、り、り
ま、ま、の、ま、れ、初、を、風、吹、た、と、友、み、ま、り、つ、お、り、り、り、

五首
藤原太子の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御

水と花やわたりん
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御

長十首

春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御
春の柳の御

いりそねらむこの身なほまじきあまのまひあつた
つ所てのふとせんをわらへくをそののそそ
りまてまなを地ゆつここのひつをそとあつた
まのうらまれそそとぬれひそひそ思おせん
すまの海のあまるとあまの思はぬ人ひあて
梓らまゆつたまの思ひまをひつこまの
あつたまの思はぬ人ひあて
まのうらまれそそとぬれひそひそ思おせん
すまの海のあまるとあまの思はぬ人ひあて
梓らまゆつたまの思ひまをひつこまの

あまの思はぬ人ひあて
まのうらまれそそとぬれひそひそ思おせん
すまの海のあまるとあまの思はぬ人ひあて
梓らまゆつたまの思ひまをひつこまの
あつたまの思はぬ人ひあて
まのうらまれそそとぬれひそひそ思おせん
すまの海のあまるとあまの思はぬ人ひあて
梓らまゆつたまの思ひまをひつこまの

離女首

神祇 二首

まの思はぬ人ひあて
まのうらまれそそとぬれひそひそ思おせん
すまの海のあまるとあまの思はぬ人ひあて
梓らまゆつたまの思ひまをひつこまの

旦のこがらうる暇（十年）のわねしとく（神のまへ）
釋教のまへ

法師ふ

うきまへちほくふるまふれふあひひく（まじりの道）

壽量品

うたせふいふまけをれまけまへ人のまへ月をわらう

神力ふ

まじりける仏のまらとまへ人へ今いふまへまへまへ

藥王ふ

まじりけるまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

勸持品

まじりけるまへのまへまへまへまへまへまへまへまへ

五音 二音

まじりけるまへのまへまへまへまへまへまへまへまへ
水のまへまへまへまへまへまへまへまへまへ

別

まじりけるまへのまへまへまへまへまへまへまへまへ

五音

まじりけるまへのまへまへまへまへまへまへまへまへ
まじりけるまへのまへまへまへまへまへまへまへまへ

立心よつたきりくなく嬉の接のつりりり
約より接の元よ秘をそくそぬのたよまを
接の元よつたきりくなく嬉の接のつりりり

祝 二音

そ代ハ等よ約りのこくさく照すまぬ子とかな
まこまは代とさうん母中よまをまのうしん約ハ

物名 二音

ゆりや ゆりや

弥山よつた代ハ等ん株のひくくさくさくさ
らんひ まくま縁

すうらうまの人のからりりりりりりりりりり
半臂字石を秘初字に抄流雖不可改
反學可ぬ 少ことこにひとすじ
こと ぬ可秘

迷懷

まきこひふらうのん白書れりりりりりりりりり

二見浦百首 文治二年 園位上人勅進之

詠百首和詩

侍從

言のかりゆゑにまよはぬまよはぬ程のりたる馬の二匹

夏十首

ちりねとわがうね花やさくふまきとるうづはひり
又てふふまたてとんそくけりうづいほふふおやうは
わら草らうり野らの夕風さつわり丁より都り
うづやまされくして所ちをさつわらぬら村の免
五月のそめめうそと初月の夜のそそとらる備
夏より花柄トよおせれて司の種と風よるぬれ
程そらうそそわけてん夏の終の若こす月やまひ
若井川よりの栞のまこしうづよるゆが秋のうら

所こらうせはりうらうらうと備えたるうれ下り
ろそあらう若れふおおそくわけよはさふ若りハ

秋女首

夕月書秋の字もまよわもよ秋りあはとれけつ也
鳥所の書とるつるまよと又程りうらうす秋のと凡
これとまよと書はまよとわられく秋のそめおのそ
秋のそめ風のたけとてふとふんこのつとるの夕音
夕音のそめと書はまよとわりうらう海のとる秋の夕音
秋のそめ人の書とてうらとてねとらる月あけけ
つらうらうらうの秋のそめとてふとらうらうのそめ

後弟生れ其の河内のはまよりのけらるゝ家ぬらん
とひけれはつれをのね原の草すかおめを替りて
社たてをきつくえをうらぬんかのえ柄一若くはれ
行むつ若ぬる年とく替へり今くえとちよつせ

戀十首

世中よたれそこのきつてわたりやせしひらん
ぢりふとゑぬん地をのつとちきうよののきつ
はせしうううゑきううのえ替りしめぬん公つり
ゑて早く替へるをきぬとけのまのわくつり
わきの原えつり月のえういとうせうくかきれぬ

きくつひの原の海よりまねてきつしつとまき
ゑきういん所うと子けつりこはたうつ而れれさ
わられつてはれ風のひりしりてききつひん
あつとらきつ中とらりつりけきまんとつら
ひらとひのけきつつなまねてきつんたのそきつ

述懐五首

月よみか若とらうまのうらふがらわねぬんか
よのつとあきあをよつてけけいしんよとあき
あつとらうしつりてつりてつりてつりてつり
わつとらあきとあきとあきとあきとあきとあき

月乃り秋の夕と掃きとサ一はさきてそくふらるる
三帝又育

まひりよまをとりり世中のかきてさきふるさかたれ
とて世のけりたるの葉枯るればよきあやうあり
世中にたれをさすもさすもさるとありといふのしこさ
かきいへんまきてまわりの世のつれまわらうあまの
人をまわりのあけゆるすもとられうらういせむりあり
難

神祇の旨

まわりの神のけりたるのあまの世のつれまわらうあまの

まわりのあまのけりたるのあまの世のつれまわらうあまの
あまのあまのけりたるのあまの世のつれまわらうあまの
あまのあまのけりたるのあまの世のつれまわらうあまの
あまのあまのけりたるのあまの世のつれまわらうあまの

暁

あまのあまのけりたるのあまの世のつれまわらうあまの

夕

あまのあまのけりたるのあまの世のつれまわらうあまの

秋

あまのあまのけりたるのあまの世のつれまわらうあまの

山家

山家行のありては風をよそよたぬるまゝのり

田家

山家行のありては松のしるしをよそよたぬるまゝのり

山

山家行のありては松のしるしをよそよたぬるまゝのり

河

山家行のありては松のしるしをよそよたぬるまゝのり

河

山家行のありては松のしるしをよそよたぬるまゝのり

後

山家行のありては松のしるしをよそよたぬるまゝのり

山家行のありては松のしるしをよそよたぬるまゝのり

楊貴妃

山家行のありては松のしるしをよそよたぬるまゝのり

李夫人

山家行のありては松のしるしをよそよたぬるまゝのり

王昭君

山家行のありては松のしるしをよそよたぬるまゝのり

上陽人

きりぎりす... 陵園妾

閑居百首 文治三年冬ら越中ゆ程

諫百首和寄 侍従

春女首

ふくむまの... 春女首

静かなるまより... 春女首

かきこゝれ地をさふ風をそわられぬと夕方言ふ
秋風のひらきとあまひのそなふる音川のわ
まやうれぬとまうねとて常はあはれと約ふ

秋二十首

吹風は新風の萩にさうその秋のつらふ人への
葉の原とさきまのあやうとのさゆく秋のちとて
せれまふらうれあひのじつやまをさうれ秋の夕言
らとさきまのあまひのそなふる音川のわ
まやうれぬとまうねとて常はあはれと約ふ

秋の夕のえとつらうと秋のつらふ人への
葉の原とさきまのあやうとのさゆく秋のちとて
せれまふらうれあひのじつやまをさうれ秋の夕言
らとさきまのあまひのそなふる音川のわ
まやうれぬとまうねとて常はあはれと約ふ

あつらひがらふにけり此あまのひて教うの世しはんりふふ
氣のまらみちの結なみとわくおてのそくせまいとまらん
世中とちひのさのそくそつて世の節とわさうそん
踏ればわだのそまふねやりて勢のそらりしそす
約うらけよつてそとあつらふとそんりふのそけふ
際のそすのそひそりそらわらわらふそあつらふ
里ひらふ大のそまふそまふつらけりそれ人のそ
菊枯そとふそあつらふそまふそまふそあつらふ
さのそらつらつらそまふそまふそまふそあつらふ
そらつらつらそまふそまふそまふそあつらふ

あつらひのそらつらつらそまふそまふそまふそあつらふ
そらつらつらそまふそまふそまふそあつらふ
そらつらつらそまふそまふそまふそあつらふ
そらつらつらそまふそまふそまふそあつらふ

皇后まふ大楠百首

文治三年春御選之

蘇百首和歌

春十五首

侍従

りらふのそらつらつらそまふそまふそまふそあつらふ
そらつらつらそまふそまふそまふそあつらふ
そらつらつらそまふそまふそまふそあつらふ
そらつらつらそまふそまふそまふそあつらふ

梅歌よみののゑいふけとともを瓶うつまうと釣えとら
気まきうねのそりれくかきまけなすきととも
法今より病ぬきそらま由きとともいひる玉柳ふ
秋音とよけかりこまきり瓶よこまけり
あつらんれんを色といひすとも瓶の都のまきま
白とともいふ病よまをてつわのゆこのそとも
瓶よと瓶よと口うき瓶よ伏見の里れま
そとつひられたどの病瓶はついで志賀の風
つふしてまのむつくり瓶のけけままきま
ひまきまのそらまきとともまきま
ふりふける瓶はまきまきまきまきまきま
わらひ入りといふそらまきとともまきま

夏十首

いそとともいふ神よ瓶はまきまきまきまきま
わらひ入りといふ病のそらまきとともまきま
元と元とともいふそらまきとともまきま
あめたはまきまかわけけはつらまきまきま
あつらむとともいふそらまきとともまきま
あつらむとともいふそらまきとともまきま
あつらむとともいふそらまきとともまきま
あつらむとともいふそらまきとともまきま
あつらむとともいふそらまきとともまきま
あつらむとともいふそらまきとともまきま

くまのぬれあふ物よりしてわたりまてちのりて
浪風のおろしき方いとまきまのりすそつじ
そら川をぬれあはれまよふふひこふ風をひく

秋十又二

秋のまよとよせまじくやさ月のをとみく萩の露
馬水にたけのひけりまきいじくふらつ萩の露
夕ぐれはるや萩のわたれ人ゆふもあつじ萩の風
神はまき萩の白き露もよと風はつけささつとん
秋のまよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の
まよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の

我がまよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の
約可じ萩のまよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の
つよまよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の
とまよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の
まよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の
萩のまよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の
まよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の
まよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の
まよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の
まよは萩の露のこらまきつ萩のまよは萩の

冬十首

定りたけぬれせれたまふいそや雲のうつくしき人
冬ふたの燈ののり杯のそむくまに花やいんほり人
後杯すし身らいたるは酒の宴かふもみれ曙の歌
ふりきう木れ葉のたもとをまてあまらりうきと
ひ影まけりつれものたうこや此れゆきこくしそ
神にれきとくまふ打あうり月けやうらあひの神
つる雲ふたそとまらるる四かり花と花のあのみり
所よりける雲のうきことあさうりはまぬたあつめ
とりこやうきたれあまを接り約束さうり雲の橋
年れゆきうらうりうきこくしそみか言のうきあ
わかれ

忠無心十首

我意よまわくしてはあさうりあまこくしそ
そをけり忠つそとれみうりふけせとかりて移るま
つるあやうきとれとあせまこくしそ移るはそらよの
うき所しん人のあやうきこくしそあまらるるあ
神のよまこくしせれあう海ふか人のあまこくしそ
かりたらてはけとそまを海川あまらるるあま
わらまらるる海ふかあまらるるあまらるるあ
まらるるあまらるるあまらるるあまらるるあ
まらるるあまらるるあまらるるあまらるるあ
まらるるあまらるるあまらるるあまらるるあ
まらるるあまらるるあまらるるあまらるるあ

寄法文悉みそ

人天交接兩得相見

人の世に生るる人時多しと云ふは、
我不受身命

我不受身命

わかれやがたの心をわすれしは、
又如淨明鏡

又如淨明鏡

清く正しくありて、
如渡得船

如渡得船

言ひて、
又如一眼之龜值浮木孔

又如一眼之龜值浮木孔

たゞ一りの眼に、
奉和無動寺法下早率病醫百首

奉和無動寺法下早率病醫百首

文法二年書

蘇百首和歌

侍臣

いざな川院百首也
今略し不書之

春

年暮りわかれとての憂可なり、
鳥の宮をたゞし、
いさよふの春の鳥

ふとてくもろつ下よあまつりてらのまじらるまれ若うか
去年より申すまの白あまより梅く家ののりまのて
とくくもれをりれくもあまれふまらるまはは春は柳
若くく清ふくまれおりにてうらやあつるまのまじ
つてせんぞ井は橋の也くしてうたかたよまて思ひ能く
まはよと言らるあまよひて我のまはれおると幼れ
とらよとや若よといてそ幼れのおりままのつらるれは
まやうららふかりはゆららるる藤よかそれよりまれ
思ひのたのあまよふまらるはれらる人よまらるり
まのまじらる幼れまらるせん首戴のまよら幼れのまじら
まはれつる幼れのたのつてまはよと申ん神のまは
園のあえおれまは八橋よまらるるつらるるま
まらるつらるまらるれ若のれまらるるまのらるまひよ
らふまよそのまらるまらるまらるまらるまのれ
まらるまらるまらるまらるまらるまらるまらるまらる
ま

つらまらるまらるまらる神のまらるまらるまらるまらる
秋冬はまらるまらるまらるまらるまらるまらるまらる
まらるまらるまらるまらるまらるまらるまらるまらる
まらるまらるまらるまらるまらるまらるまらるまらる
まらるまらるまらるまらるまらるまらるまらるまらる

乃 夏ふゆのりほの原の風さそくしゆりては秋なりけり
麻 麻の絲つるふらふのわかれを家のうさし秋のふら
房 増さふまの神のあまひてふゆのふらふのふらふ
音 秋ゆく音らふまにけりけりけりけりけりけりけり
惟 されいふとていふとていふとていふとていふとて
池 池にけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
月 秋まはるし秋まはるし秋まはるし秋まはるし秋まはるし
後 後まはるし秋まはるし秋まはるし秋まはるし秋まはるし
生 生うたふし秋まはるし秋まはるし秋まはるし秋まはるし
平 平入りけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

冬

冬 冬かたけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
雪 雪月いふとていふとていふとていふとていふとて
霜 霜葉ふらふのふらふのふらふのふらふのふらふの
露 露叶さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
雲 雲わきけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり
雪 雪まはるし秋まはるし秋まはるし秋まはるし秋まはるし
霜 霜わらわらふらふのふらふのふらふのふらふのふらふの
露 露わらわらふらふのふらふのふらふのふらふのふらふの
雲 雲わらわらふらふのふらふのふらふのふらふのふらふの

噴らりけりやあふらぬ噴人よとらんあせりて
如木ノ梢のまいつきては千あつるいかにやうきり
牛 吳竹の枝よいふかきりしやうりしものさし
若 朽く山此若林の若れりしよまよふあけさき
病 乃ちののこまきいふれ油やうりれ病の跡えき
心 ちとあぬのちかきふ家きりては毎へうつさ
河 ちとせ川いふふかのこまきりしやうりし
夜 力のそよけせりしとあつていふさあつて
因 くらんさきさきさきさきさきさきさきさき
物 力のうらむららのころさきさきさきさきさき

海 ちとあつていふさきさきさきさきさき
夜 ちとあつていふさきさきさきさきさき
別 ちとあつていふさきさきさきさきさき
心 ちとあつていふさきさきさきさきさき
泉 ちとあつていふさきさきさきさきさき
信 ちとあつていふさきさきさきさきさき
身 ちとあつていふさきさきさきさきさき
幸 ちとあつていふさきさきさきさきさき
祝 ちとあつていふさきさきさきさきさき

重奉和年率百首

文保六年三月

百首和奇 同記

春

春の光はついでに此等もとりあつての御も美にさうり
 子れりすあけのわねのひさしくさういふとまもあふ
 初きて結ぶくはあけはあられえさるまを際うか
 まゆこれ等のまゆあさささるゆきののうすつかり
 りたさうさう人のさるんがまもあつねあけのさるま
 河舟あはれ別のとろりうらさうさうさうさうのまゆ
 まのあけの月あけのうらさうあつねあけのまのまゆあけ

載とびりきとふまをうらさうさうさうさうのま
 さうさうあけのうらさうさうさうさうさうのま
 さうさうさうさうのまのまゆさうさうさうのまゆ
 まもあけのうらさうさうのまゆさうさうさうのまゆ
 引よさうのまのまゆさうさうのまゆさうさうのまゆ
 きれよさうのまのまゆさうさうのまゆさうさうのまゆ
 かつよさうのまのまゆさうさうのまゆさうさうのまゆ
 さうさうさうさうのまのまゆさうさうのまゆさうさうのまゆ
 すまふつこさうさうのまのまゆさうさうのまゆさうさうのまゆ
 さうさうさうさうのまのまゆさうさうのまゆさうさうのまゆ

約まよしはなみの花うるたりはほやくらん
すまを約ま神は白ふらまはつとらまはみらふ
まはまよし約ままよしとつらまはまよし

夏

ぬさるるせはれな神あまてまののそつとまひひ
とまひひあつくとあつとまひひあつとまひひ
あまの川あまの川あまの川あまの川あまの川
都まよしはなみの花うるたりはほやくらん
風のあまの神は白ふらまはつとらまはみらふ
行まよしはなみの花うるたりはほやくらん

とまひひあつくとあつとまひひあつとまひひ
あまの川あまの川あまの川あまの川あまの川
都まよしはなみの花うるたりはほやくらん
風のあまの神は白ふらまはつとらまはみらふ
行まよしはなみの花うるたりはほやくらん
かたの火の煙のたをまはつとらまはみらふ
あまの川あまの川あまの川あまの川あまの川
都まよしはなみの花うるたりはほやくらん
風のあまの神は白ふらまはつとらまはみらふ
行まよしはなみの花うるたりはほやくらん
かたの火の煙のたをまはつとらまはみらふ
あまの川あまの川あまの川あまの川あまの川
都まよしはなみの花うるたりはほやくらん
風のあまの神は白ふらまはつとらまはみらふ
行まよしはなみの花うるたりはほやくらん

冬

秋の風のいとまはすすかさるふのそつらこし
らりる積しそののつらふそつらきやまはせりん
とれえうそれりし菊のまじ又くすしつれその露が
わたれるそれらちし風さして岸に寄く海のみ波
静まりしつらつる岸のあゝ色さくきす静るをふ
かりきせぬるきあふまふはげしく小風さすん
つれとて思わくれば海風あそびをさうりふ
舟川流すのせれなきこそこゝろに風はさすり
しんくすそをさすなきはれそつ入るるあゝのあひ

よよとてかきしるわはり本より此をえれ風物り
つとさうしはれはれこきあけてもあそびるあひ
とまらつるよりのあゝのすり夜更のそらよそいひ
小船さやもたなきしりゆきすし海の静らりん
は火のひらりしそひまきそひひくひりし静るさふ
さうりる余りしとつらすくとわもこゝろあふ年れ言ふ

憲

白の世とひさるるひんゆはなれまらぬ風もさる
あふらまきはるるさよ家もさるけさし年れさ
あひみそあはれものつとあふまこつちもひりたえいそ

西の入り行く風の吹くは若きやうなるまのうらう
 下れそふくもくゆと揚氣うらうのまふ風いん吹
 ちさこのまふ風の白く揚氣てさうらうゆいまのま
 玉降のたりうらう揚氣又いさむまのまうらう
 山揚つらう風のまうらういさうらう人の思せうらう
 けいそわきさうらう白くさうらうゆいまのまうらう
 揚氣にうらうゆい一羽と梢上のうらうらうらうらう
 山揚つらうまうらうゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 けいそうゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 けいそうゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

梢上のうらう風の吹くは若きやうなるまのうらう
 下れそふくもくゆと揚氣うらうのまふ風いん吹
 ちさこのまふ風の白く揚氣てさうらうゆいまのま
 玉降のたりうらう揚氣又いさむまのまうらう
 山揚つらう風のまうらういさうらう人の思せうらう
 けいそわきさうらう白くさうらうゆいまのまうらう
 揚氣にうらうゆい一羽と梢上のうらうらうらうらう
 山揚つらうまうらうゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 けいそうゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
 けいそうゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

ちりぬそそりて物とくもえんちりすもあまの老る
社たふまれの老ふまらねそ若りや影のちよ影の
心風とちりす可ひ年と重とこりりあるは影のふん

月五十首

秋のさぬ月のあのみふりりたえは並雨の秋の影の
そのつら月の老よとまひて秋のま可なりあいのえ
うきそらのまきうけ秋の夕なりまつをさおそわ月影
そそまの秋そそけの月のまよとあやうくくそまの影が
秋とつた元すし月とそとれてま約する秋のちあ

秋とてつた元すし月影とこわうしす入霜のまき水
ねりりあゆのまきうけとちれいあとのあふ月をそ
あつちちり山井は流およよちつ下と月のけをそ
深草の里のまきうけいあまこそを照とつるあふ月影
まじらやまら秋の秋の風とて月とこくく宇治の橋非
あふとくこさう秋のふとふはちつる月のわられん
そのつと馬とまら後ふ月とつるに秋とつす
あままはは屋のあまのあひて月のまよと影のまき
ちりぬぬのまらしのまらあて月の秋とつれはあ
月影よこすまらうけつとらんばあのをとるな秋とつす

て秋の定て一秋ははらむもふよわらう月のけけ
すやうとこれおき絲さの代と元よえり此れ新うに
天川幸れはうに秋はけてよふつらぬ方の新のよ
らうやとる秋はついでるまのきよさしうて秋のま
やうかおまらぬ風とよまの昔の白はらとと
見すもあらうの世ぬ名の秋はたひささるる名
まらまらあつたふらんぬまのりんのつとえり
よのらうさつる風をうてあはらうるそのま
くはるす秋の定よふんてつらうとわすあつたは
地部十首

秋のやきしす春のむのたつとせぬらんやうと
まらうとよきとせといふるあはれはれうとよき
うらやまはつてはつれ玉うたはまのあまらあま
まはらうとよきあはれはれはれはれはれはれはれ
よはれはれはれはれはれはれはれはれはれはれ
まらうとよきあはれはれはれはれはれはれはれ
秋はうに入に中れゆと六月のあとのまの浦は
月のすきまのよの秋はれ一秋はわけぬすの
あまのれはれはれはれはれはれはれはれはれ
かろうとわらうらんやうとわらうらんやうと

辰愛十首

百歳よりうき玉の心もあはれしとては後のがふ
けりつれは侍もれとあはれしとては月夜もあはれし
新井治也の心もあはれしとては月夜もあはれし
心もあはれしとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
村島の人とては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
見よさるるよとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
懐枕の心もあはれしとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
はあはれしとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
病病の心もあはれしとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし

あてうたのさ原をけりつれは月夜もあはれしとては月夜もあはれし

草十首

年比ゆいふ人の心もあはれしとては月夜もあはれし
神代よりあはれしとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
さくさくをあはれしとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
たりせよとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
花はあはれしとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
あはれしとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
我もあはれしとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし
さくさくをあはれしとては月夜もあはれしとては月夜もあはれし

如きは海へかゝるものよあつた風を馳せしめ
まればそとせよふらふせり此物もあつたてよんて

木十首

葉とあつたひらりよあつた葉のうらよまゝにねたのよあつた
枝のとつたの枝杖よりあつたまゝにねたのよあつた
まればこのひらりよあつたねたのよあつたねたの
まゝにねたのよあつたねたのよあつたねたのよあつた
まゝにねたのよあつたねたのよあつたねたのよあつた
まゝにねたのよあつたねたのよあつたねたのよあつた
まゝにねたのよあつたねたのよあつたねたのよあつた
まゝにねたのよあつたねたのよあつたねたのよあつた
まゝにねたのよあつたねたのよあつたねたのよあつた
まゝにねたのよあつたねたのよあつたねたのよあつた

夕なれ風はすくろ桐の葉よまゝにねたのよあつた
時を待つらば此言枝よ風はくそまゝにねたのよあつた
消らるるの心風はくそまゝにねたのよあつた

鳥十首

鳥心こつたれどよあつたのよあつた
あつたらまづの鳥はつたつたつたつたつたつたつた
風を待て清きこゝけらよあつたつたつたつたつたつた
かまらねたつたつたつたつたつたつたつたつたつた
夕空のそまのりけつたつたつたつたつたつたつたつた
つたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

海東の里の夕花をいまして
物名のどぶらうのり
さねふ花枝をうらまのまの
打さる花枝は
人との冬のおちぬのさよ
花のそのふえり
はさるうたれよえける
なうらうらうらうら
さるいひ

獸十首

所いしまはなまよふりて
そのの鹿よつらわと
花さくさるまねのさ
まよあやうらうら
花さるものささるひん
ふす枝のわらうら
あさうらうら
はのつふあひん
月のうらうら
はれ花よ
さるいひのさる
うらうら
家のうら
犬のうら

花さくさるまよふりて
そのの鹿よつらわと
花さくさるまねのさ
まよあやうらうら
花さるものささるひん
ふす枝のわらうら
あさうらうら
はのつふあひん
月のうらうら
はれ花よ
さるいひのさる
うらうら
家のうら
犬のうら

世十首

尚代よりちる花のま
さるすさる
まよあやうらうら
花さるものささるひん
ふす枝のわらうら
あさうらうら
はのつふあひん
月のうらうら
はれ花よ
さるいひのさる
うらうら
家のうら
犬のうら

海にのめいひふみぬきり積りてふ日曜のひ
まはりのまの葉まにらふかゆのなまきりふ
まやうに松のたけのたけふとまきりふ
うけてせとつたのたけまじりてふまきりふ
まきのちりやまきりてふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ

神祇十首

まきりふまきりふまきりふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ
まきりふまきりふまきりふまきりふ

釋教十首

歡喜地

うまの海にまきりふまきりふまきりふ

離垢地

心死して空しく一切の縁を断つて空しく坐す

明地 發光地

智慧の光が照らす如く一切の煩惱を断つて空しく坐す

煖地

智慧の光が照らす如く一切の煩惱を断つて空しく坐す

離瞋地

嗔心断つて空しく坐す

現前地

智慧の光が照らす如く一切の煩惱を断つて空しく坐す

遠行地

智慧の光が照らす如く一切の煩惱を断つて空しく坐す

不動地

智慧の光が照らす如く一切の煩惱を断つて空しく坐す

普賢地

智慧の光が照らす如く一切の煩惱を断つて空しく坐す

法華地

智慧の光が照らす如く一切の煩惱を断つて空しく坐す

古今

荷合百首

建久四年秋

三年給部今又臨憚身依不依抄致在出奇

部百首和奇

春

元日宴

信少将

まふれい星れくぬふ新きてそめのうよおらたてり

信色

庭わすしつるまふえりてまゆりたはあめり

まふ

ゆのうらめい白浪立ちりま風立ちた地のあつふ

若草

まふくまのうらめい白浪立ちりま風立ちた地のあつふ

賭射

まふくまのうらめい白浪立ちりま風立ちた地のあつふ

師匠

まふくまのうらめい白浪立ちりま風立ちた地のあつふ

雄

まふくまのうらめい白浪立ちりま風立ちた地のあつふ

まふ

まふくまのうらめい白浪立ちりま風立ちた地のあつふ

遊線

くろくまきれはるるふくまへて可なりをうたはるる人

春晴

千重の花鳥よとらわねてまよふるのまのまめ

平日

つら口のひえきのこふ能くは花鳥のいせとまは

志賀の歌

神の宮を吹風ひらりて花よ自れは花のこふ

三月三日

かゝの記とせしむる月のみまはるるまはるる

怪

ひのつり藤の末のわいふ回よりひよまの音こひ

残去

木根のひらりつらりと白くと新しめはまの歌

夏

新樹

新しす水とまをせらるるまはるるまの歌

友原

友原の弟のあしけそそれわらうまをわらう

おろそ

まはるるわらうつらひのりらひひまおけよるま

新河

しらうらまはるるくわくわく^す新河いふをきとさのり出の歌

友秋

友の秋のうらまはるるに枕しゆく新河はるる秋の友

友衣

勤つらうれあはけのさきりてさきしもかたは友衣ふ

扇

風ふあふまふ秋のうらまはるるまらさふまねとと秋歌

夕秋

^{初は松}着るるそあはるるく風あはるる秋の友まらるる

夕夏

月日る秋の下まらさあはるるく自ふ夕夏のえ

蝉

嵐のあはるるくあはるる秋のうらまはるる

秋

秋暑

秋のうらまはるる夕月とねるは友とあはるる

乞巧奠

秋のうらまはるる星合のさあはるる秋の燈

縮妻

新くすすたに神の考れとよきとてしうにの稲妻

新

月とすしに内とふわきけううは糸とそふ新風

新

秋のふらりりー風の枯れびとそはあつた

新

初末の秋の思をせられたる村のつひとそ

新

秋よとてつうすうとそあつたの旨の思をせ

新

くよとていかにあつたに秋の風の神の思

新

の衣すまののつひの権神しうとそはうの

廣津池畔を

すまける秋の思を月とすう秋の思を

地

善の屋の考とす秋の村の思を

新

時とていかにあつたに秋の風の思を

九月九日

いふはとんはたつ月夜もふくむはじの菊の末のやう

秋夜

まけし秋の夜もふくむはじの菊の末のやう

音秋

有竹の名もつり秋の月夜もふくむはじの菊の末のやう

冬

落葉

かひれしつらつらうる夜のまよふと梢の冬よのたし

残菊

白菊のりねと秋のまよふと梢の冬よのたし

秋野

まよふとつらつらうる夜のまよふと梢の冬よのたし

節抄章

かり夜もつらつらうる夜のまよふと梢の冬よのたし

電

いふのまの村をひらきし秋のまよふと梢の冬よのたし

冬物

いふのまの村をひらきし秋のまよふと梢の冬よのたし

冬物

いふのまの村をひらきし秋のまよふと梢の冬よのたし

椎葉

志の葉は冬もよみよみはれずとも葉はすあり
食

引く白紙は此葉すまはるるやと云ふは
佛名

六竹のよひく葉は年暮してはれ仏のみかと云ふ
徳

初葉
忠葉
あつたのりか火燧名をうてはれよと云ふ

こけりわたりたりつれふたはひくせと云ふは
関葉

ちりうたふすまの葉のかり春のよきてはれ
貝葉

うはらわさしはの葉のよかりやと云ふは
易葉

西葉はよと云ふはなると云ふは
新葉

年よりの葉はよと云ふは
葉

わらねのうらなはらうの余りたあさきまのきとほりよ

約意

風うらなはらふおの神祇ふて実りおまふりつら

逢意

きふすはあをうらほおふりつてあさきまのきとほりよ

列意

ふれうらなはらふおの神祇ふて実りおまふりつら

脚意

うらなはらふおの神祇ふて実りおまふりつら

佛意

年たつらあつらよのうらなはらふおの神祇ふて実りおまふりつら

縁意

うらなはらふおの神祇ふて実りおまふりつら

怨意

わらねのうらなはらふおの神祇ふて実りおまふりつら

まは

藁意

うらなはらふおの神祇ふて実りおまふりつら

噴意

わらねのうらなはらふおの神祇ふて実りおまふりつら

羽意

やうりかひのつとむとせすへんまきうのゆかしの氣

盡意

をくはあひのまねまねける我神のつとむの氣

父意

無倫えまねまねける夕暮のつとむの氣

秋意

ほろろとつとむのつとむの氣

老意

晴まわらぬまねまねける我神のつとむの氣

幼意

葉まわらぬまねまねける我神のつとむの氣

遠意

かみまわらぬまねまねける我神のつとむの氣

道意

波まわらぬまねまねける我神のつとむの氣

極意

古まわらぬまねまねける我神のつとむの氣

寄月意

月まわらぬまねまねける我神のつとむの氣

家意

時のまよきそはのくはきしきうと今わひたるる

赤風意

あさきく秋つれ風のきこじりて花しら秋のきこ

赤雨意

さうすいしひをきこたのひと神よ西の時うけ

赤煙意

けりつれをこれ思のゆえとてり人煙のそそやあき

赤山意

是夜のつゆの神よつる神うらぐ人のわくき

赤河意

流うさいみわらせやまうかひはるまふとあはし

赤海意

と成さう人のむかうかられきり舟の移るる所

赤園意

力よたれ思と流すの言すて今とてきこひん

赤橋意

人のとてはくよまうりあはえりし神の雨流

赤草意

いさり赤草あつるは思ふ思たててうねりまけ

赤木意

新の若ししはるかきうてりとの若の若やうてり

赤鳥立

栢

奴の如く入はるはとていひて神をさうていふ

赤敷立

うやまうふす物の赤くすくちりけりて神をさ

赤生立

鳥の若くはし鳥の若くはるおりの若

赤笛立

笛竹のうてりて若くはるさうていひて沙せとて

赤琴立

若くはるてりていひていひていひていひて

赤笠立

若くはるてりていひていひていひていひて

赤衣立

赤衣の若くはるてりていひていひていひて

赤席立

赤席の若くはるてりていひていひていひて

赤女立

赤女の若くはるてりていひていひていひて

赤備立

赤備の若くはるてりていひていひていひて

一秋子初... 此里は多岐路ひすけける人の聲りと

春海人恋

神を今い... 海のおもひ... ことなほひよ... 思ふ

春樵夫恋

心よりかけ... 思ふもの... ことなほひよ... 思ふ

春商人恋

ふりて市... 思ふもの... ことなほひよ... 思ふ

春日侍 太皇太后御同部百首

製表初新

後仁徳上行在道... 御同部百首

春女首

春女首... 思ふもの... ことなほひよ... 思ふ... 思ふもの... ことなほひよ... 思ふ

1120

物とそて神打をふりけしつゝあにりしその方夕言
白妙にたひくをきとつまきてあまわさるる風の根凡
座の向かきつすいの網籠をたるをいまたつたて
てふりまよとこまひの所とくう年此方轉らん

憲十首

久里北のまける神のたふろくしそとせとこむら
相孫とつきの所のうらふふわかれあまに神の人如
わかれとんいつさこのよのきのそ初よりちりと海ま
あまのまをたてふもあまのちの龍向きのつたてられ
ふらふ小はあひの書かあひのうめ後のまをひつたて

噴いまける神とさひかよはるそ風にあこめかり
約人のこのよのむれあまのまてそのとあらゆら
うたよく所をなほしうらうらとんあかてん
初四日月とあなれしひひそちれ孫とまな初
えせらあまのそまの我言とつたあまのま

後五首

昔花夕あたまふそはろのをこもふふと
物との月と初のあにせわしてせまふつらあ人
つらとまれのつらさたつああにて月とそま
初つらとあまのらと初倍て今とあまの

朝も夕も海のはしにけりしつらき月よとれぬ秋の隠風

山家五首

新秋のささぎのこゝろかおどろきても神の栴柊のこゝろ
秋のふぶきとつらき風のうらみは秋の栴柊のこゝろ
海のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ
雲のふぶきとつらき風のうらみは秋の栴柊のこゝろ
夕のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ

鳥五首

鳥のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ
鳥のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ
鳥のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ
鳥のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ
鳥のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ

祝五首

祝のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ
祝のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ
祝のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ
祝のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ
祝のささぎうらみの言ふふらふも秋の栴柊のこゝろ

山家五首

冬... 新... 日...

冬十...

秋...

新... 冬... 秋... 日...

山... 海... 雨... 秋... 日...

祝...

祝... 秋... 日...

我知しきまりの言とまりの言よらひの世世恒々のね
万代のまねたまふまのこころを月よのまねたまふ
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね

戀十五首

わんごのまねたまふまのこころを月よのまねたまふ
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね

わんごのまねたまふまのこころを月よのまねたまふ
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね
らとの海とまりの言とまりの言はるる世世恒々のね

歌十首

たをけしけりては後のともぞはらうへさくもの元
たのきなりてはのまにさひさかたきとらうへさくもの元
とよふおきさきりきんりやうはらうのひられ者の通は
初とうへひのま川のまははる来はらうのひられす
元よひあやし風をたふははるのまはらうのひられす
物又ひらしとて小たきのひらきとて打つたき
たのきまのまはらうのまはらうのまはらうのまはらう
年やまのまはらうのまはらうのまはらうのまはらう
とらうのまはらうのまはらうのまはらうのまはらう
初物のまはらうのまはらうのまはらうのまはらう

十九明...
内大臣家百首

建保三年七月十三日

詠百首和歌

春十首

早春

赤嶽

萬々もこのてはめまはれそとてさうしん風見に

多雪

わの雪の今よりりく常とてこのまはらうもまはらう

野雪

まはらうの今よりりく常とてこのまはらうもまはらう

海雪

Palakano

かすてふ散りてはるるれ散りてはるるの海風

ありありお散りてはるる散りてはるるの海風

物あり菜

はるるも物ありけはるるは種ありてはるる散り

散り物

種ありてはるるの物ありてはるる白よまきとわす

散り梅

久々の月夜はるる梅の花を散りてはるるまうて

夕陽あり

昔の月夜はるるをてはるるの香よ散りてはるる散り

散り花

つらつら散りてはるる散りてはるるの香よ散り

散り花

散りてはるる散りてはるる散りてはるるの香よ

散り花

散りてはるる散りてはるる散りてはるるの香よ

散り花

散りてはるる散りてはるる散りてはるるの香よ

散り花

さしすももわすれなむ 残美

残美

まいつと能くこのせのふ 嘆ひて月ころり

夏十首

首夏

あまればとわさひしよさぬ 花のぼくにのふの暗

夏草

さゆりもゆふのなきよけのひてとれぬよまはれぬ

初部 初部
このふのけのよけにまはるまはるまはるまはる

繁華けり

いとよのささやうのまきんけらたらよのふのささやう

杜けり

けらふらわらうのなきの葉のそとと海やわら

池草蒲

み月さのけりこのわらけきてけりあはし自らの

ふみ月を

等つとき定のけりよなきとらそとわらぬやうの

花つ橋

橋の袖のきりり者よとよりとよりふやれぬを

澤書

并に...の書よのきよあつるを...
...
...

樹信納原

...
...

秋十五首

初秋

...
...

行路歌

...
...

ら家虫

...
...

夕萩

...
...

菅原

...
...

原系

...
...

明月

...
...

江月

わすよの入江の月の氣よりうれしくよの夜のはる

浦月

なまこれ月の光と白妙よる江の浦の波の枯風

橋月

ふかうの岩の榎うらりわひて種いそめの月をよる

河月

光よす玉流河の月をよるし女の衣袖とる

曉橋衣

まらねとつむのくさつ月のまよとのまよとるまよ衣を

を村はる

ふりしけりせりれわのうらりしれやあはけぬ種いそり

古寺紅葉

そしたつれはあつ清のよる紅葉とあつ岩の古寺

書帖

物のかりふたふりし首のよるとはなふるあはすか

冬十首

田家付ぬ

すいすい田家のらりしけりよはけぬてらるる冬は

節徑糸

物糸の糸のけの糸の糸をよる人の袖をよる

水郷をさる

冬宵のふかき寒さうらむる時のもまやと風よる

そと采子馬

浦ふちのうらま定すしめてゆく妻の月のうらま

湖也

かまふよるる月をまきわかれとつらなる海流

深文義

ゆらぐまきと海心の本うらまは羨望せりかき

林也

らるるわきて秋のまきけと今より深きと精の白を

演習

かたもて夕りの深月をうらむるに下りてしむる

思書

けさの夕にうらむるうらまのよれをいふ

采書

約年よとるるうらまをいふとつらなる

戀二十首

身在可

うらむるかたけの深のふか風よるまはあはれ
くまよの深きれとまよるるまよの深きれとまよるる

何のどのの神とていふにけり
かゝるの神の御心は
主田の中をけり
我神ふじり
そとふ
若の御心
白玉の
今
ま
わ

かゝるの神の御心は
つ
た
尋
宮
屋
あ
形
神
と

今更に秋のふくむるはてきさうとて人のせむ
山人のよまひと雲のたけしむせのさうよわらうとて

神祇五首

信譽 石窪水 智叡 春日 任者

才とまきいづのこゝろてたのこゝろ川に流るけり
ふりか月とさそと雲とらんをひけり神のまこと
神と見えし川の河原のふりかるるをまきけりを
ふりかるるふりかるるまよまきいづとて神のまこと
かゝるる我のけりふりかるるをまきけり任者の神
釋教 女首 春日 釋教 阿蘇院 葉師 藤部
天津元 女とまきいづりかるるをまきけり

二月のつえにれをてかゝるるをの都と判り月が
九月のれをのそとまきいづとて神のまこと
十のまきいづのちかひまきいづとてまきけり神のまこと
れをのまきいづのちかひまきいづとてまきけり神のまこと

内裏百首

名不

初冬同諫百首和詩

春二十首

糸織有原定家上

音羽川

よとて川をけれけり岩成て雲のちかひまきいづとて

建保三年十月廿四日依来初行中殿宴於内裏

玉河

梅の香もあつらん人影さうれ玉河川の花の後に
さう妙

さきさきとまきとまきさう妙のうすまれうのねのうか

春日節

あや菜つひと火の燈りりやうやふふ海面のうすう
三編

いさぬまうととこれとこのいふはまこれわさの飛ん

昔木

さ柳のうすれこのうすれりりうささううあさう

自由

うら花のうすれ神またしけい花のうすれううう

伊勢海

いさの海より波はあつていひわうこれまのまう

志智浦

さうのうすれ花のうすれりりあさうう風をい

三崎江

みゆいのうすれうすれうすれまのまのまうう

恒塞浦

あつまうううううううううううううううう

空け山

ふらの山 我物と死と 此所このまらまを 毎たふ

世を全る

わの屋の我物と死とを 毎たふのまらまを 毎たふ

ふと溪

ふらふら 此所の我物と死とを 毎たふのまらまを 毎たふ

満寺云云

我物の向く 此所の我物と死とを 毎たふのまらまを 毎たふ

悲心

此所 此所の我物と死とを 毎たふのまらまを 毎たふ

水戸河

妻のまを 此所の我物と死とを 毎たふのまらまを 毎たふ

大淀浦

此所の我物と死とを 毎たふのまらまを 毎たふ

田舎浦

たに浦の 此所の我物と死とを 毎たふのまらまを 毎たふ

末ね山

わらわの 此所の我物と死とを 毎たふのまらまを 毎たふ

夏十首

大井河

本井川さるのせれよのまへへあまらうとらうとあひま也

藤田集

なみのりけのせくつらまふつすまのれ毒の下に

猪名節

千うよれいこのさ原かりそうまをいけぬとさつと

伊震濯河

月さるそりす川の都と新のつらとわすれ

伊名保派

かまらうらりあまふよまふいむわくちんさく

天香具心

お月あまののこさるらそをわらわらあまのまうこと

大江心

夕すこありのの玉うと粘とけらあれこり

野田心

とらるやあかりえよそく玉のうれいらいあま

美豆沖粒

はらすうらりこの新とや津の家うれ夕影の光

和浦心

傾の羽のあま粘とまうかひまらうらのあまあ

新井首

海舟

そらとれりす夕の山月と秋よふのわたりのとれ

秋田

ついでに里の多そらけいこさうもたはち

沈磨浦

懐衣まひる夕の夕まふ始はるすまの海風

玄海節

秋よあひてもとるるるらあといままらるる玄海の秋

水菜忌

あらあゆのまらすまのすし軍のあまくと秋風

小倉

とらふ秋の意や秋まらるる秋まのつとらふ

宇治河

川ゆきまらよのすしをさるるらるの秋の枕

常磐松

初られまらるる秋の意やあまらと秋まらる

三玉

とらふに付むとあまを秋のよのまらるる秋の夕

弓園節

あまのあまらるる月とあまらるる秋のよのあ

伊勢

三浦の口鳳の秋のまよふくも海の赤のうらみ

生田池

けむりゆきと秋の赤くく上池のまよふくも

伊人園

伊人園の秋のまよふくも

長谷野

たかきふくくくくくくくくくくくくくくく

伊吹

秋のまよふくも

文科里

とくくくくくくくくくくくくくくく

白河園

白河園の秋のまよふくも

野崎

野崎の秋のまよふくも

石浦

石浦の秋のまよふくも

阿波隈河

阿波隈河の秋のまよふくも

冬十首

清洲河

春よりふゆのえけぬとらなせていよよまじり清洲の河

小塩山

わさねとるゆふをけてた原とてふみのふゆまらるは

任者油

わつらゆひのその村のぬそくとよまこの任者のね

実節

かりんのゆふをみそをそとひのわつらふゆをそと

田舎水

とれわつたをえそまのり極家たれぬゆいそいふか

有乳山

あらしの麓のわつらとれそをれおてよわつらふゆ

浮気原

富士の麓のわつらとれその積りぬいよのまけらる浮気原

安達原

そまのり麓のわつらとれそをれおてよわつらふゆ

母傷山

あらしの麓のわつらとれその積りぬいよのまけらる母傷山

鏡山

かきふらまらぬのひつらうえんうらゐるまぬの月

恋女首

伏見屋

笹竹のやゐの室ハ名の屋とつるまのよめはむとま

庭浦

ま庭うすれ海と釣舟のうれあゝるぬ人と恋つ

石漱森

秋のみのいせの毒のいすんききうーりふ積る朽を

筑波

わが心まきつこいけらぬのそひよたあそんくうきこ

神浦

神の浦ぼろぬまのなけつらそとそくうのゆふ

蓋田池

人かひしきまきこれ池およるいそけきるあとうしは

高師溪

わが流のたうれ流のそあまねおまきすいけそ張急水

阿波の森

かきそのあこれあのとらうけそわそねまよあまき舞を

志賀川加流

秋風吹送とらうあすねらうーぬよねらう秋の

廣名橋

あるまじく流の橋より約とる約とるわん坊の園

磯岡浦

待り破りの海よりわん坊のけりわん坊の

守山

舟より下る人より下る舟より下る舟より下る

佐野布奈橋

と河より下る舟より下る舟より下る舟より下る

安積音浪

舟より下る舟より下る舟より下る舟より下る

ねり

ある秋といひつらうえつらん舟の舟の舟の舟の

結後橋

琴の橋より下る舟より下る舟より下る舟より下る

三熊野

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の

鳴海浦

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の

二見浦

舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の舟の

名取河

さうり川 河原を千代木のこころりあめ神のまゝ

新二十首

古野河

古野川 岩とけしと千代木のまゝを我々の代にわが

新麻河

すま川 名をさけりてさへさへさへさへさへさへさへ

不盡心

心あふやのまゝさへさへさへさへさへさへさへさへ

還心

いん川 心の中をさへさへさへさへさへさへさへさへ

海橋立

しん川 心の中をさへさへさへさへさへさへさへさへ

町田川

まち田川 心の中をさへさへさへさへさへさへさへさへ

多野

たの川 心の中をさへさへさへさへさへさへさへさへ

辰市

たけいち川 心の中をさへさへさへさへさへさへさへさへ

吹飯浦

ふきいり川 心の中をさへさへさへさへさへさへさへさへ

平政の秋もかけぬのさうして打つる多しこの秋もさう

布川流

布川の流よたしとわさひて秋年の里れあましうん

長柄橋

ささわらむ名ものさうはく板くらすいとの人さあ

玉川宮

と飛くさす流ののわさあしほぬさうりあまの里

生浦

ふあさされあうささあ海はあささりあまの里

小栗中へ

軍の戸とささひんかいたとさあまの里のあまの里

暖歌節

流ひさし流のさありあまの里のあまの里

南大河

しらぬの流めれあまの里のあまの里

志加庵市

ふれぬさああまの里とさあさうさあまの里のあまの里

若浦

しらぬの流めれあまの里のあまの里

お飯岡

春の光をひらきしむる花のやうにふかきあふれぬ

沖け浪

すらしの 春の光をひらきしむる花のやうにふかきあふれぬ

春日同諫百首應

製和歌

仙洞 建徳元年

糸後後三位行法親王侍從藤原守長前俊實家上

春女首

春の光をひらきしむる花のやうにふかきあふれぬ

春の光をひらきしむる花のやうにふかきあふれぬ

友衣がらうれはうはさう結はゆめよくかやう結風
木のまよりうほのふうすれ音月あはれつう夕影れ
夕雲のそ心風ゆけのまふあつらうものゝあふ
わすら川せせのゆまをれしてさくらん年あうるが

結二十首

ゆめふあふふらうさうあされあはぼゆめ結のゆ風
七夕のてほりしゆふとらさうかりしゆふゆのあう
秋のそ結のゆあゆゆゆ結ふとらん結人のあう
ちてさうゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
あふれのゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

秋の月川ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
秋のそゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
あゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
まゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
あゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
まゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
川ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
秋のまのゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
まゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
あゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
あゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

りるのほのぼのを結とるふくはくわりなりさうつら
苦かりてうらつらんや由緒の流るるのちよきしん
長月のりさらのあつたけぬらうりぬれとそいせり
いほむ川りや夕暮のこゆやいふくらゆく秋のりさ
本のころそ風をひらうらうらうとよまぬ秋のきふ

冬十の首

あつたけ暮の梢のゆめくつふらうらうゆめを月ぬ
風をひらふのうらうらうとよまぬ秋のりさ
とよまぬ秋のりさうらうらうとよまぬ秋のりさ
かきこれといふのうらうらうとよまぬ秋のりさ

かきこれといふのうらうらうとよまぬ秋のりさ
冬草と枯ふくわらわらうらうとよまぬ秋のりさ
あつたけ暮の梢のゆめくつふらうらうゆめを月ぬ
風をひらふのうらうらうとよまぬ秋のりさ
とよまぬ秋のりさうらうらうとよまぬ秋のりさ
かきこれといふのうらうらうとよまぬ秋のりさ

しひひしちらのさされあまれいあまれい宮も身ははら

戀十女首

今も昔もいつの月かや此秘の事さ物のをさうさう
所るをこれとてさしとてささあ人の思ひを
らる房のとほつ凡のなりあさわぬ思とさうさう
まらるもあれさうよのりさうれさうの思を
よもさう月さう思て秘をさう今もさうあ
くも秘をさうけさうさうさうさうさうさう
秘のさうさう秘を秘りて思てさう人さあ
ひあさうしひのさうさうさうの思の思さう
さうさう

ついで人めさす秘ふり秘の秘めさうあ
さうさうさうさうさうさうさうさう
右さうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう
秘さうさうさうさうさうさう
秘の思ふか秘かりさうさうさう
下ひの思ふさうさうさうさう

舞十女首

ぬねさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさう

山王の好むひをえらるるのたれはくひをえらて
しをぬのほの格の事なりとのひわすりつ
たれをうへてくむいふの力の人とて思ふは
つらきこととてしるるはこれとて思ふは
これにむかひなきふりてまわすむじや知ふは
此花をまはらるる月をこれ列のこえんや
今もまはらるる月をこれ列のこえんや
玉輝や揚りんつてたよ國を人よ新侍の事
そり代のあるひのひのちをれは我をくこの力に
つらきこととてしるるはこれとて思ふは

先撰二百首思奇有結書事一何可
惜拾其遺又美食和元年全百首
之初學子建保四年書三卷之家集
は是之間再居拾遺官故為以草名

建保四年三月十八日書之
糸後拾遺官為仍後市原

関白左大臣家百首

貞永元年四月

詠百首和詩

鹿

権中納言定家

あさりまの山よりたけなまひそくまの鹿のまよふ人
ゆきやまの鹿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ鹿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ鹿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ鹿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ鹿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ

猿

あしむ猿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ

あしむ猿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ猿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ猿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ猿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ猿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ猿のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ

書

あしむ書物のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ書物のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ書物のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ書物のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ書物のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ
あしむ書物のまよふ人よまよふまよふまよふまよふ

部々

たすく 賜物者 皆人 けちき ぬらふらうり けんて
けちき ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて

八月

雲々 けちき ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり
八月 ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて

早秋

くねくね 雲の けちき ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり
けちき ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて

月

けちき ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて
ぬらふらうり けんて けちき ぬらふらうり けんて

下秋の月を神まらりの月の名は身と心なり神風
秋の月にはまらるる香の七十は神なり地をさす
若草も多し水も新しなりまらるる此秋の月の
まらるる秋の月と名はなりなりなりなりなりなり

水

水は神の心なり水は神の心なり水は神の心なり
水は神の心なり水は神の心なり水は神の心なり
水は神の心なり水は神の心なり水は神の心なり
水は神の心なり水は神の心なり水は神の心なり
水は神の心なり水は神の心なり水は神の心なり

水

水は神の心なり水は神の心なり水は神の心なり
水は神の心なり水は神の心なり水は神の心なり
水は神の心なり水は神の心なり水は神の心なり
水は神の心なり水は神の心なり水は神の心なり
水は神の心なり水は神の心なり水は神の心なり

香

香は神の心なり香は神の心なり香は神の心なり
香は神の心なり香は神の心なり香は神の心なり
香は神の心なり香は神の心なり香は神の心なり
香は神の心なり香は神の心なり香は神の心なり
香は神の心なり香は神の心なり香は神の心なり

羨うも室のあまやゆきんきりたればおのわらふ
ほろりしらとてしんらんまきりたればあまのうき

忠意

にやれまのちいふまきりて下の思やいれをせん
あられのくそあおぼはせりつらきあまのす
えまけりておのふ藤原もまおきりてあまの
白雲のくもをけりてあまのたれとてあまの
こころあまのほろりたれあまのあまのあまの
不遇意
よりかきてあまのあまのあまのあまのあまのあまの

よみの月夜あまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

後朝恋

い海あまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

遇不逢意

余そりひみんしほまれすうつこの秋のこころい
らうつらふののりうういさうくありよこつては
海とのむせわつとこれ数うもふれてはほほほ
らうつらふののりうういさうくありよこつては
まうつらふの中し秋のそりうつらふの言

怨恋

この世のむせわのそりうつらふの言
のりうういさうくありよこつては
まうつらふの中し秋のそりうつらふの言

この世のむせわのそりうつらふの言
のりうういさうくありよこつては
まうつらふの中し秋のそりうつらふの言

旅

旅のそりうつらふの言
のりうういさうくありよこつては
まうつらふの中し秋のそりうつらふの言

山家

山家のそりうつらふの言
のりうういさうくありよこつては
まうつらふの中し秋のそりうつらふの言

ねのきよしんをいんのかのいんかむいん
月を月とらじしんかんのいんかむいん
若うれまの野の夕多りいんかむいん
いんかむいん下家のいんかむいん神のいんかむいん

朧を

百家のいんかむいんあつていんかむいんあつていんかむいん
いんかむいんあつていんかむいんあつていんかむいん
いんかむいんあつていんかむいんあつていんかむいん
いんかむいんあつていんかむいんあつていんかむいん
いんかむいんあつていんかむいんあつていんかむいん

迷傷

神風をすすめいんかむいんあつていんかむいん
あつていんかむいんあつていんかむいん
あつていんかむいんあつていんかむいん
あつていんかむいんあつていんかむいん
あつていんかむいんあつていんかむいん

祝

あつていんかむいんあつていんかむいん
あつていんかむいんあつていんかむいん
あつていんかむいんあつていんかむいん
あつていんかむいんあつていんかむいん
あつていんかむいんあつていんかむいん

言前
言代とくしうろくしうろくしうろくしうろくしうろく
いさよろくしうろくしうろくしうろくしうろくしうろく

蘇百首和歌

春女首

閑跡早春

前和歌得業生壬生貞岑

たのむうの夜河まきとくしうろくしうろくしうろく
湖上朝霞

竹のけみろくしうろくしうろくしうろくしうろくしうろく

庭園を耐

三橋のふすろくしうろくしうろくしうろくしうろくしうろく

鞆中夜考

初うをふすろくしうろくしうろくしうろくしうろくしうろく

出柳竹考

山嶺のふすろくしうろくしうろくしうろくしうろくしうろく

回きこみ考

ふし田のふすろくしうろくしうろくしうろくしうろくしうろく

野外残雪

美り花のつりの言のまゝそよ降らんあつ袖をぬきふ

山踏梅花

多し多しそよ降る梅の花白くまゝ人のめりあふ

梅葉秋風

白ひら花よこしに物まこころれぬ秋の星や都人

水色古柳

年月は柳のまゝりか柳ひけらるる川の末のよのま

面中約花

多し多しそよ降る梅の花白くまゝ人のめりあふ

節花ぬん

ばまゝりうら世をまきて花のちりよる春の星のり

そら山花

多し多しそよ降る梅の花白くまゝ人のめりあふ

噴を花

わらわらよのまゝりうら世をまきて花のちりよる春の星のり

古柳夕花

里のわらわらよのまゝりうら世をまきて花のちりよる春の星のり

河と雲月

初春のまゝりうら世をまきて花のちりよる春の星のり

深衣初月

まは秋の八町のあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

菖菰風

秋風のあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

橋色秋冬

あそびのあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

舟中書

あそびのあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

夏十首

卯辰臨路

卯辰のあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

秋夕部

あそびのあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

山家付

あそびのあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

池朝京蒲

あそびのあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

閑居故火

あそびのあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

廬櫓を差

あそびのあそびのあそびのあそびのあそびのあそび

杜月夜

ふいふのぼろぼろたる月夜のそよよとすそよの森

野夕夜草

わうわうのそよよと下にはなふ糸そよよと草と約ん

洞庭草火

日影とすよよとてそよよと草のそよよとす

約夕夜草

夕草と約とすよよとてそよよと草のそよよとす

秋夕首

初結物風

結とすよよとてそよよとてそよよとてそよよとて

同月七夕

天の川とすよよとてそよよとてそよよとてそよよとて

野夕夕草

結とすよよとてそよよとてそよよとてそよよとて

いそく草

ゆきとすよよとてそよよとてそよよとてそよよとて

乙家初夜

結とすよよとてそよよとてそよよとてそよよとて

梅と約月

海色初雪

任者の初雪、所くくつ、雲よのうらとあめと海り時人
此を色美

暮のうらとと色とそく、雲よのうらとあめと海り時人
湖とふる

この海月、うらとあめと海り時人、うらとあめと海り時人
色とそく

とれとく、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪
兼言、初雪

海り、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪

恋舟首

初雪縁恋

あひあしり、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪
初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪

初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪
忠親、初雪

初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪
初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪

初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪
初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪、初雪

立向ふ所のりのり枕をすしわらふ所なるは
魚狀噴意

し水はなるのの言とふわらふとあぬるやまを

切之書意

物ありさる神よりしてさるるるるるるる

遇不逢意

しえんいつくくの多うてをれうのるるあれ

契終年意

結うはせりしくあつてせうじの契まはるよりかた

龍去仍意

たうゆし世の傳のりかたなまれぬと節の記ふ

僧返事意

おろひく給うよりえまう馬のたはまもにこれ

新歎縣意

まよおそひかあつて傷のかけさうまのぼと

途中笑意

たののりそのとよひにほひをせううー物まのあ

辰門切意

ちの屋をいしれ門のうみうまて切のそのま

忘行可意

きよし約月

ひまのしきの春うらさふよみかきしつ月と約月

山中流水

そよれわたりれしうつまねそよのこころの流の白玉

河水流流

新の清流流川の夕なりけあのうらさうすうりうり

善秋の秋

あやの秋の流の音とふりまねるののふねまらまの歌

同流約客

約人のうらんとわふとくあやふみうらひえ雲の秋風

山家夕嵐

善のゆるりの暮あめの山風よのきとりては雲の秋川

山家人稀

あやとあやうらむらうらうらとそよとあはれを流のう

海色眺む

あやとあやうらむらうらうらとそよとあはれを流のう

月鞆中友

夕照よとそよりそより秋のうらとそよのなとあはれ

接室来ぬ

接室わらわたりと新の白神ふねとそよとあはれ

海を眺む

海を眺むと云ふは、人の心を、海に任せ、
海に身を任せ、海に心を任せ、海に身を任せ、

海を眺む

海を眺むと云ふは、人の心を、海に任せ、
海に身を任せ、海に心を任せ、海に身を任せ、

海を眺む

海を眺むと云ふは、人の心を、海に任せ、
海に身を任せ、海に心を任せ、海に身を任せ、

海を眺む

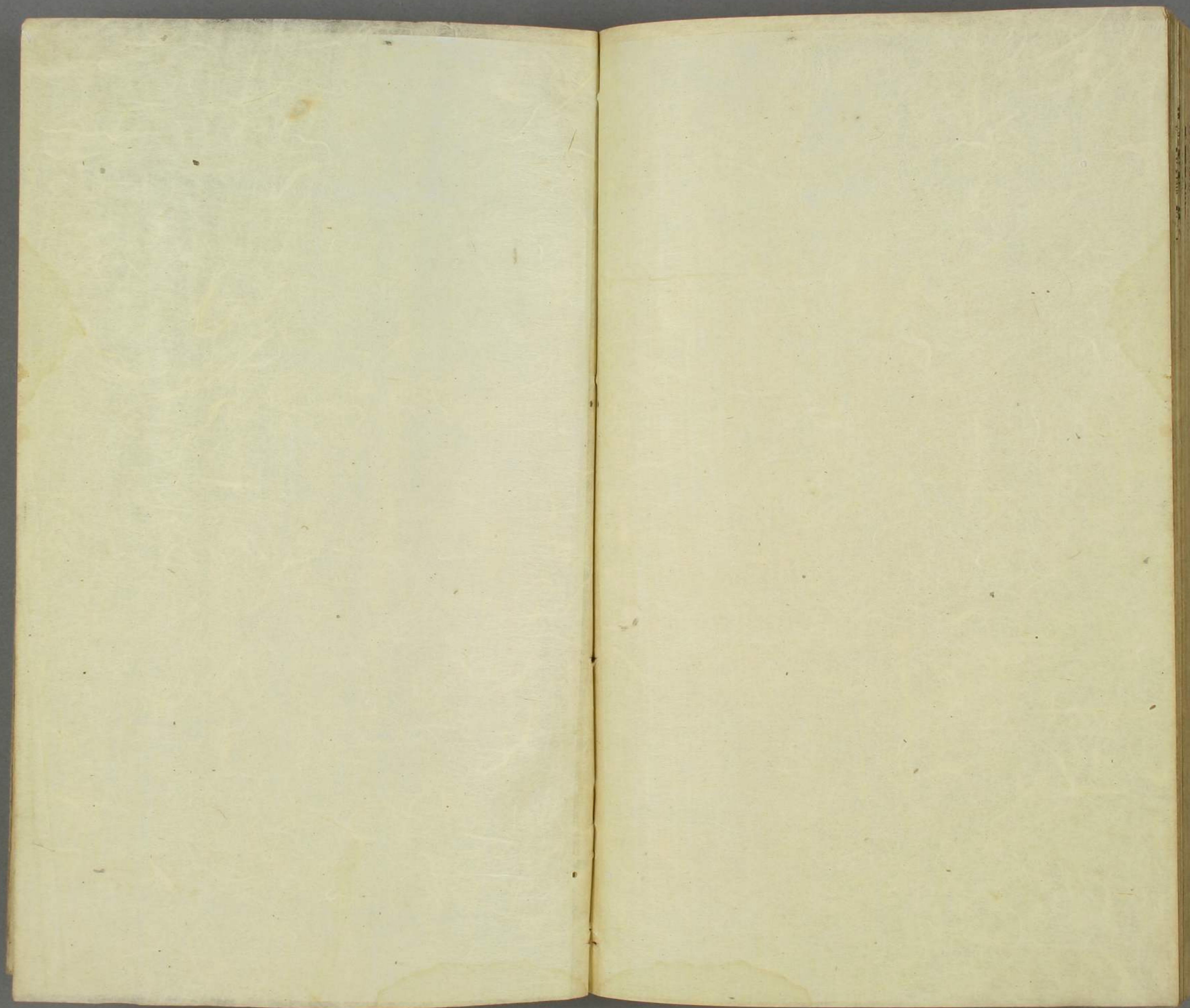
海を眺むと云ふは、人の心を、海に任せ、
海に身を任せ、海に心を任せ、海に身を任せ、

海を眺む

海を眺むと云ふは、人の心を、海に任せ、
海に身を任せ、海に心を任せ、海に身を任せ、

海を眺む

海を眺むと云ふは、人の心を、海に任せ、
海に身を任せ、海に心を任せ、海に身を任せ、



天正十一年

癸未

六月朔日 江戸 江戸十一年 書切

江戸 江戸十一年 書切 外 江戸

江戸 江戸十一年 書切

書切

